

ロベルト・ミヘルス著

『ドイツ社会主義における サンディカリズム的底流 (1903-1907)』

氏 家 伸 一 訳

訳者前書き

以下に翻訳する「底流」論文はミヘルス自身の思想的発展とその研究のうえで重要な論文である。まずはじめに、本論文がミヘルス自身の手になる唯一の自伝的文書であるということ、しかも、青年時代のミヘルスの思想と行動を取り扱っているということを確認しておこう。従って本論文が青年ミヘルス研究に——時に無批判的に——利用されるのも当然のことであろう。近年この論文の隠された意図が指摘されている。これは後に触れるとして、その前に興味深い事実を指摘しておきたい。それは、これが発表された『グリュンベルクの70歳記念論文集』に関係している。グリュンベルクはオーストリア生まれの法学者・政治学者で1910年に『グリュンベルク・アルヒーフ』として知られている『社会主義史・労働運動史論集』の編集を始めた。彼は1923年フランクフルト大学の「研究所」の所長の地位についた。グリュンベルクは、「ドイツの大学で講席をもった最初の公然のマルクス主義者であった」といわれている。彼の雑誌にはカール・コルシュの「マルクス主義と哲学」(1923)やジェルジュ・ルカーチの「モーゼス・ヘスと観念弁証法の諸問題」(1926)という重要な理論的問題を扱った論文も発表されたが、この雑誌は「もっぱら、エンゲルス＝カウツキーの伝統における、どちらかといえば非弁証法的な機械論的なマ

ルクス主義に立脚した歴史的・経験的研究に捧げられていた」とされる。ミヘルスは本稿以外に次の4編の論文を寄稿している。

- ①「カルロ・ピサカーネの愛国的社会主義もしくは社会主義的愛国主義」
(1913年, Band, IV, Heft 2)
- ②「イタリア議会の初の社会党議員」(1916年, Band, VI, Heft 1)
- ③「前資本主義時代におけるプロレタリアート観について」(1926年,
Oktober)
- ④「クルト・アイスナー」(1929年, Band, XIV, Heft 3)

1931年, 研究所の所長がホルクハイマーに代わり、『グリュンベルク・アルヒーフ』も廃刊となる。「社会研究所」が発足し, 「批判的理論」が展開され始めるわけである。『記念論文集』にはミヘルスの他にポロック, ホルクハイマー, ウィットフォーゲル, グロスマンら, 初期の「研究所」にかかわった人物, そしてグリュンベルクのウイーン時代からの旧友, マックス・ベアやマックス・アドラーらも寄稿している。(グリュンベルクとフランクフルト学派についてはマーティン・ジェイ, 荒川幾男訳「弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 1923-1950」みすず書房, 1975年を参照。)

ミヘルスと「批判的理論」が同一誌で席を同じくしたのは奇遇ともいえるし, そうでないともいえる。共にSPD型マルクス主義の批判を目指しながら, 一方は既にファシストであり, 他方はネオ・マルクス主義の旗手となるからである。

さて, 先にも示唆したように, この「底流」論文の意図は青年ミヘルス＝サンディカリストを証言することであった。ミヘルス自身が注記しているように, 第三人称形式で書かれており, それは客観的な信憑性を有するように錯覚させる。ミヘルスによれば, 彼は1900年頃からイタリアのサンディカリスト(A. ラブリオーラ, E. レオーネ)らと親しくまじわり, 1904年初めにはソレル, ラガルデルらフランスのサンディカリストたちとも交渉をもつようになった。そしてこう書いている。「彼 [ミヘルス]

『ドイツ社会主義におけるサンディカリズムの底流 (1903-1907)』

は、周期的に来るべき社会への準備をさせる演習行動としての、孤立した直接行動とゼネストの神話には一定の距離をとってはいたが、その新しい方向を本質的に支持することに抵抗は無かった。それは、精力的かつ大胆に、マルクスをプルードンやパレートと融合させることで、労働運動における理念的・精力的ポテンツを復活させようとする」ものであった。しかしドイツの労働運動にはそれを受け入れる「革命的伝統」が欠けていた。しかしミヘルスは自分たちの運動が無意味であったとは言っていない。この自伝的文書は「当時のフランスやイタリアの労働運動を強く際立たせていたサンディカリズム運動がドイツでも、全く痕跡を残さなかったわけではないこと」の証言である、と彼は末尾に書いている。

確かに、『1918-1923年のサンディカリズムと左翼共産主義——ドイツ自由労働組合（サンディカリスト、ドイツ一般労働組合、ドイツ共産主義労働組合）の歴史と社会学』（1969）（H. M. Bock “Syndikalismus und Linkskommunismus von 1918-1923”）を書いたブックも「アナルコ・サンディカリズムの伝統の精神的創始者」の一人として、B. G. ケスラーやR. フリーデベルクとならんでミヘルスをあげている。その根拠は主にこの「底流」論文にある。それに加えて彼は、『政党の社会学』に至る諸論文を検討して、SPDへの「革命的不満足」がミヘルスをして「革命的サンディカリズム理論の知的受容」に至らしめたと書いている。そしてブックはこう結論づけている。即ち、『政党の社会学』でミヘルスは「党内民主主義の問題を力強く提起している。この問題は第一次世界大戦の間に、左翼共産主義とサンディカリズムの組織の成立を心理的に準備した。ミヘルスはグスタフ・ランダウアーが…アナーキズムの根拠から行ったことを、サンディカリズムの前提から、自分の批判的な政党社会学で別のもっと精密なかたちで行ったのである。この二書『社会主義への呼びかけ』と『政党の社会学』は第一次世界大戦の前に行われたSPDに対する非マルクス主義の左翼的批判の主著である。」

ところで、イタリア・サイドでは、この論文を書いたミヘルスが既にフェ

シスト・ミヘルスであったことに焦点を当てる。例えば、シヴィーニ——彼は1980年に最初のミヘルス・アンソロジーを作成した——はこの論文にファシストを偽装するミヘルスの作為を感じとった。即ちこの論文は「サンディカリストの経験をファシストの展望の中に復位させる」試みなのである、と。(Sivini, introduzione a, *Michels. Antologia di scritti sociologici*, a cura di G. Sivini, Bologna, 1980, p. 9, n. 6) フェッラーリス——彼の一連のミヘルス研究はその後の研究に決定的な一撃を与えた——はこれを受けて、ミヘルスを「ソレル流の革命的サンディカリスト」とか「幻滅した革命的ロマン主義者」とする従来のミヘルス解釈をステレオタイプと批判した。こういうイメージ形成には二つの利害関心が逆説的に合致したとされる。(P. Ferraris, 'Roberto Michels politico (1901-1907)' in *Quaderni dell'Istituto di studi economici e sociali*, [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 1/1982) 先ずファシストになった晩年のミヘルスが、政治的に戦闘的な青年時代の自画像を労働運動の伝統的な中央派の陣営から放り出し、公式にファシズムの歴史的構成要素と考えられた、「生の哲学」流の非合理主義的文化の中に位置付けし直すというミヘルスの意図が一つ。もう一つは、伝統的な中央派の労働運動の政治家や歴史家の利害関心で、彼らは『政党の社会学』を真面目に読まず、それを「外部」からの、「敵」の、ファシストになった一ソレリアンによる批判として片付けたかっただけである。両者の利害が一致して「政治的ミリタント」というミヘルス像が作られたというわけである。加えてフェッラーリスはパオロ・オラーノ文書の慎重な再読を促している。

オラーノ(1875-1945)はもとサンディカリストで後に1919年ファシスト党员となりペルーシア大学の教授を勤めた。いわばムッソリーニやミヘルスと同じ思想的遍歴をたどったように思える人物である。彼はミヘルスの死の直後に出されたペルーシア大学法学部の紀要のミヘルス追悼号(1937年)に「ロベルト・ミヘルス——友、教師、同志」と題する追悼文を書いた。フェッラーリスはこの文章の「慎重な正確さ」に注意を喚起し

ている。オラーノは先ず「彼 [ミヘルス] が革命的サンディカリズムの運動の支持者であったとはいえない」、たとえ自分が「このイタリア人の勇気ある努力に同意したとしても」と書いているのである。また「1906年10月10日、サンディカリストたちがイタリア社会党から出た時以来、…彼らとロベルト・ミヘルスとの出会いは稀になり、ついには途絶えてしまった」と述べていた。(Paolo Prano, “Roberto Michels-L’amici, il maestro, il camerata”, in, *Studi in memoria di Roberto Michels*, R. Università degli studi di Perugia, Annali della facoltà di giurisprudenza, vol. XLIX-1937, Serie V-vol. XV, p. 9-10)

少なくともこうは言える。すなわち、先のミヘルス自身の文章も示唆するように、〈ミヘルス＝サンディカリスト〉命題の意味するところはそう単純ではないということである。こういう非常に〈問題的〉な文書ではあるが、本論文はかつてのミヘルス研究に重要な方向付けを行ったという意味で決定的な資料であることに変わりはないのである。

なおこの「底流」論文は二つめのミヘルス・アンソロジー（独語）にも、注の一部を省略して収録されている。*Robert Michels : Masse, Führer, Intellektuelle-Politisch-soziologische Aufsätze 1906-1933* (Mit einer Einführung von Joachim Milles), S. 63-79.

ロベルト・ミヘルス著

『ドイツ社会主義における サンディカリズム的底流 (1903-1907)』⁽¹⁾

— [Robert Michels, “Eine syndikalistisch gerichtete Unterströmung in deutschen Sozialismus (1903-1907)” (1932), in, *Festschrift für Carl Grünberg zum 70. Geburtstag* Leipzig, Hirschfeld, S. 343-364.]

周囲を中小農の農村で囲まれた小さな非産業的な大学都市マルブルクで、1903年帝国議会議員選挙に、5人の候補者が立った。その中のパッペンハイム氏（保守党）とヘルムート・ゲルラッハ氏（国民社会党員でフリードリヒ・ナウマンの支持者）が3606票対4907票で決選投票にもちこまれた。キャスティングボートは反ユダヤ主義者（2400票）と中央党（1900票）とドイツ社会民主党SPD（1460票）に握られていた。SPDは前年ミュンヘン党大会での決議に従い棄権することを宣言した。そのミュンヘンの動議は他ならぬアウグスト・ベーベルが提出したもので、おまけにそれは全員一致で採択されていた。それによれば、社会主義者が敵の候補者間で戦われるという窮屈な選挙に参加せざるを得ないはめになった場合は、どちらかといえば、もし当選したなら高額な費用を要する一切の新しい軍事・艦隊予算案に反対の投票をすると予め表明した候補者を支持する、というものであった⁽²⁾。当時大衆迎合的とはいえ覇権的な政治家としてのゲルラッハにはこの可能性はなかった⁽³⁾。従ってマルブルク社会主義者による棄権は党決議の拘束力ある文章から明白な決定であることがわかった。

その理由を述べて、決議はさらに、候補者の作家パウル・バーダン、代議員で印刷業者のゲオルク・ヘルトリックの著名入りで、ドイツ社会主義の民主的な分子にとって当然非常に気にかかる中間政党を排除する必要を主張した。こういう思考過程は、もちろん必ずしも優れてはいないが、次のようなかたちで言い表された。

「SPDの有権者は、国民社会党にその愚昧化政策への道を切り開く手助けをするようなことは自分から何もしてはならない。保守党は公然たる反動勢力である。彼らは将来、両面からの攻撃にさらされるであろうし、きれいさっぱりと片づけられるべきである。国民社会党は変節漢であり、昔の反ユダヤ主義者のやりかたにならって、多くの教養なき人々を政治的にたぶらかしている。

SPDの利益にとって重要なのはやはり、政治闘争における明晰さだけである。一方では働く人々、とりわけ労働者階級に対する公然たる反動とむき出しの敵視——これが保守主義である。他方ではすべての被抑圧者のための進撃と階級闘争の代弁——これが社会主義である。両者の中間にあるものは保守主義そのものと同じく政治的な巨悪である。

場合によっては決選投票と候補者の判定にとって重要になりうる帝国議会選挙への態度は、今回はほとんど問題にはならない。というのも、中央党がいままでのところかち取った成功からみても、次回の帝国議会で秘密・平等・直接・普通選挙権に手がつけられることは考えられない。中央党が自己保存のために選挙権に手をつけるのは、それが大量の労働者の票を失った時である。

従って一つのことしかありえない。

我々は投票を棄権する。

最後に我々がそのように余儀無くされたのには第三の理由もある。つまり、ゲルラッハは決選投票に残ったたった一人の国民社会党員なのである。他のすべての国民社会党員の議員候補者、その中にはナウマンも入るのだが、彼らは第一回投票であっさりと敗北したのである。数百万人の政党で

ある社会民主党を片づけると豪語して政界に打って出たグループの最後の代表を手助けするというような恥知らずなことをしてはならない。

よってSPDの有権者には一つのことしか残っていない。投票の棄権、これである。」

これは、民主主義と帝政、艦隊政治と自由貿易、ユンカーと革命への闘い、これらを入り乱れて代表するような政党、またフリードリヒ・ナウマンが押し進めるような政党の結成の試みへの反動として生じた社会主義者のあるグループの気分と合致していた。クルト・アイスナーも（1898年まで）活動していたが、彼は国民社会党に痛烈な批判を加え、次のような結論に達した。すなわち、政治衛生学は、時の混乱をそのような両生類によって一層高じさせるようなことは絶対認めない、と⁽⁴⁾。

当然ながら棄権の決定は大きなセンセーションをまき起こした。ヘルムート・フォン・ゲルラッハは狼狽して、マールブルクの社会主義者には二つのグループがあると苦情を言った。一つは素朴で理性的、決選投票では彼に味方する。それに対して、もう一つはマールブルクにおける大学出の知識人からなる小さなグループで教条主義を抱懐しており、奇妙なことを期待させている。「この人たちは、労働者にとってより大きな害はSPDにとってのより小さな害であるという見地から出発している。」⁽⁵⁾彼らにとっては、選挙での反動的な候補者の当選はより小さな害である、と⁽⁶⁾。

一つの点で彼のいうことは正しかった。

事実、決定の背後には主に、当時マールブルクに滞在していた何人かの若い知識人が存在していた。それは、パリ、ミュンヘン、ライプツィヒ、ハレ、トリノーで学んだ哲学博士のロベルト・ミヘルス⁽⁷⁾、ティルジット市長の息子ですでに世界旅行をはたしていたエルンスト・デジnk、その弟子で後に出版社を営む自然科学者クルト、ミヘルスの妻でハレ大学の歴史学者デオドル・リントナーの娘ギーゼラ・ミヘルスであった。ドイツ系ロシア人の哲学者、ヘルマン・コーヘンの弟子でトルストイも翻訳しているオットー・ボイクは、党には属さないものの折りにふれて言葉や文書

で支援をおくっていて彼らの近くに位置していた。多くのカント的・トルストイ的な要素、義務の意識と真理ないし信念の人の勇気が歴史哲学のマルクス主義的な歴史理解者と結びついていた。しかるに今度は、マールブルク支部の有効な決議に対して、党の規約上の原則と支部の独立性とを完全に無視して、SPDの内部の日和見分子が反対してきた。クルト・アイスナーの指導下にあった党機関紙『ベルリン・フォアベルツ』が6月24日に一つの記事を載せたが、そこではマールブルクの選挙区と指名問題を顧慮しつつ、こう言われていた。すなわちパンの暴利^⑧を挫折させることが重要なところでは、この目的が他のすべてに優先されねばならない。従ってマールブルクの社会主義者はゲルラッハに投票するのをはばかってはならない、と。さらに、ゲルラッハの友人でSPDの代議士のヴォルフガング・ハイネはすぐにこの記事をベルリンからマールブルクのゲルラッハに打電した。それに続いてゲルラッハは、自分の戦時の権利を行使して、すぐさま号外をまいて、首尾よく最終局面で多くのSPD票を獲得し帝国議会への当選に成功したのである。

これは、党機関紙と議員候補者指名の指導権を握りこうして厄介な党則を無視してもかまわないと考えている指導者集団による党大会決議と民主主義の無視であった。すなわち、指導部対被指導層の対立である。といってエリート理論のような自覚的な原理ではなく、無自覚的な悪しき習慣と議会制の効力の過大評価に基づく対立である。マールブルクのグループは激昂した。しかもグループの一人がハイネに対して向けた非難に触発されてハイネが同じように『フォアベルツ』(1903年8月12日)に投書を発表し、そこで彼が非常に高飛車に、自分は電報でマールブルク社会主義者が〈恥をさらし〉、その態度で一人の反動を帝国議会におくる手助けをするのを止めさせることで義務を果たしたに過ぎないと宣言するにおよんで一層激昂するはめになった。

こうしてアウグスト・ベーベルがこの問題に介入することになった。彼がロベルト・ミヘルスにあてた手紙は後者のベーベルあての書面と入れ違

いになった。その手紙（1903年8月15日付けのツューリヒの近郊キュスナハト発）でベーベルはマールブルクの同志と連帯する旨宣言した。彼らはミュンヘンの党大会決議に従って、だから全く正当に行動したに過ぎない。いわんや自分もその一人である党執行部が決選投票に関して何の指示も与えていないのだからなおさらである。しかし、とりわけある党員の規律違反と権勢欲には鼻もちならないものがある。しかもたいていそういう連中が、彼ベーベルに独裁の嫌疑をかけるからなおさら我慢ならないのである、と。

ベーベルは続けて書いている。「もしドレスデンでマールブルク事件が議題になるなら——そしてマールブルクの同志が誰か手強いメンバーをドレスデンにおくって欲しいのだが——、私は自分の意図をはっきり表明します。この手紙を同じ志の方々にお廻してください。…」⁽⁹⁾

マールブルクの党支部大会はこれに対して80票対3票で一つの決議を採択し、そこで『フォアベルツ』を非合法の介入の故に非難した。1903年の9月13日から20日にかけてのドレスデン党大会にはミヘルスは24名の同志とともに、党大会はヴォルフガンク・ハイネの行動を断固として認めない旨の動議をもちこんだ。かれは『フォアベルツ』に発表された記事で暗に、「党大会決議を遵守することで物笑いの種になり」うるという主張を行ったからである。ハイネの態度は、個人的に親しい政敵のために自党の地方組織に干渉するという不見識なことを行ったのだからより厳しく非難されるべきである、と⁽¹⁰⁾。

さっそく第一日目に行われた反修正主義のベーベルの厳しい大演説——これは大会を深く感動させた——の後、ミヘルスは第二番手として大会を牛耳った。なりゆきからみて、改良主義者全員に痛手となるハイネと『フォアベルツ』糾弾の採択が認められるのは大衆心理学的にみてほとんど疑い無いようにみえた。はたして彼の新しく出来た党友たちもミヘルスを励まして、大きな波紋をよぶことになる重要な一步を踏み出すよう促した。SPDの運命が、いやそれ以上のものが懸かっていることは疑い無かった。

最左派の支援をミヘルスは確信していた。ローザ・ルクセンブルク、アルトゥール・シュタットハーゲン、ゲオルク・レーデブーアが続々と彼の味方にまわり、修正主義者への不信任決議を主張し続けるよう彼に勧めた。この大会を特徴づけた興奮に鑑みて、投票が実行されることが予想し得た。そして少なくともこれが分裂を生むことも起こりえたであろう。分裂がどのような結末をもたらすかは予想できなかった。ミヘルス自身は弾劾動議の提出を考えていた。しかし、彼が演説を終え、なお演壇に立っていた時、突然彼はそれを思いとどまった。調子に乗り過ぎたことへの反対の声が聞こえた。そして自ら全く望まずにこの重苦しい雰囲気を打ち壊さねばならないという強い衝迫にとらわれ、彼は全生命を押し殺してしまふ不信への反対のアピール、従って団結と連帯へのアピールでもって話を終えたのである⁽⁴⁾。多くの人たちには気弱に映ったであろうし、実際そうであった。しかし、やはり正しいことであった。ミヘルスは当時の日記に書いている。「留保を促した理由は二つある。若い私には、卓越した多くの人々の追放の責任を負うことなど思いも及ばなかった。さらに、急進派の人たちが、精神的にも教養のうえでも彼らよりも数段優れた修正主義者たちに示した、必ずしも個人的動機とは無縁ではない憎悪につけこむことは高潔でないように思えたからである。たとえ高次の目的のためであってもそうであった。…」

決然とした人物が躊躇している間もない時に常に決定を下し決行する、目眩をおこさせるようなスピードで、ミヘルスはあっという間に一つのイメージを生み出すことに専念した。それは自分の企図を放棄させるに充分なものであった。代議員の多くはベーベルの演説の後全く興奮状態に入り冷静な思考などできる状態ではなかった。彼らはちょうど、誰であれ、偉大なアジテーターに熱烈に賛同しそうな者の餌食になるところであった。そのようなものになることをミヘルスの良心は禁じた。彼は本当に自ら担う責任に気付いていたのだろうか。もちろんである。さらに彼は、当時の考えかたによるだけでも思慮深い我慢を命じている自分の若さにも気付いていたし、左翼の党友の何人かにみられる偏狭にとらわれた悪しき熱狂に

も気がついていた。多分——これは後になるとあまり覚えてはいない——彼は、それほど影響力がある一步を引き受けることができるほどには、党と合体しているとは感じていなかったのであり、彼の思考はすでに全く別の方向を向いていたのである。

しかしながら、ドレスデン党大会は全くのエピソードであった。当時の多くの社会主義の埋もれ火がまだ消えずに残っていたルールの労働者ストライキ（1905）と、それに対する、同時に議員の地位をも有する労働組合リーダーの制圧行為は激しい論争をまきおこした。それは、コンラート・ヘーニッシュが自分の『ドルトムント労働者新聞』に労働運動の策略家に反対して展開した激しい攻撃によって一層激化されることになる。総じて、革命的な物言いと度し難く臆病な政策との矛盾、要するに国の内政、とりわけ外交に対する300万人党員の政党の無力は一層際立ってきたのである。ミヘルス自身、ドイツ社会民主党はその巨大な体軀にもかかわらずいかなる処女をも懐妊させることのできない怪物に似ていると嘲笑せざるを得なかった⁽¹²⁾。バーナード・ショーの次の言葉は印象深かった。彼自身がフェビアン主義者としてドイツでは修正主義者と見なされただけになおさら有効であった。すなわち、ドイツ社会民主党は破局主義を気取っているが、その政治的な日常的な要求では極端に慎ましく問題にもならない、と⁽¹³⁾。

民主主義はミヘルスにとって次第に素人によるお祭り騒ぎとして、あらゆる男らしい責任感への下らない恐れにみちているようにおもわれてきた。特に議会主義にはますます、政党人——彼の計算と打算のためにあらゆる力強い理想と行動が放棄される——の専横ぶりしか見えなくなってきた。このような感じは1902年以來のナポリ在の若き経済学者アルトゥーロ・ラブリオーラやエンリーコ・レオーネとの生き生きした交流や、1904年初めいらい続いている、ジョルジュ・ソレル、ユベール・ラガルデル、エドゥアール・バルト、ポール・ドレサール、ヴィクトゥール・グリュフェールとの絶えざる友好的な精神的関係によって一層強まってくる。同年12月から彼は『社会主義運動』誌 *Le mouvement socialiste* の定期的寄稿者と

なり、また時おり、パリ・ダントン街のホテル・ソシエテ・サヴァンで開かれた社会科学自由学院で国際社会主義について講演を行った。彼は独立した直接行動や、来るべき社会を周期的に準備する戦術的運動としてのゼネストの神話には一定の距離を保っていたとはいうものの、本質的には大胆かつ精力的にマルクスをプルドンやパレートと同化させることで、労働運動における理念的・精力的ポテンツを復活させようとする新しい方向性に夢中だった。

フランスでの活発な活動はミヘルスから時間と活力を奪った。イタリア——その政治的・精神的指導者たちとは1900年以来密接な繋がりを保っていた——での少なからざる活動もそれに加わった。

この頃ミヘルスは帝国議会への社会民主党候補者にもなった。オーバーヘッセン（ヴォーゲルスベルク）のアルスフェルト-ラウテルバッハという辺鄙な選挙区である。見込みがないため彼は世界観の仕事への喜ばしいチャンスを得る。

党大会での彼の活動は全く控え目であり、副次的であった。その結果マルクス主義的と見なされるすべての努力を後ろから支えることになった一つの例をあげてみよう。国会議員から、その資格で党大会で投票できるとする権利を奪う試みがそれである。何故なら、彼らは組織された黨員ではなく、選挙人団に依存しているのであり、従ってその地位を党にだけ負っているのではないからである⁽⁴⁾。

長い間にマールブルク・グループとアウグスト・ベーベルとのつながりも維持できなくなってきた。この党の独裁者の誠実さ、彼の革命的気質、選挙算術的な陰謀への反感、熱意、まじめさ、良心、これらはマールブルク・グループとも一致していたが、しだいに溝は深まっていった。結局ベーベルは典型的な多数派政治家であって、精神的または意志的少数者の力（ましていわんやその正しさへの）信頼が皆無であった。おまけに哲学的唯物論は事物を、それが血気盛んな若者には通常であるのとは違うように見せていた。

ベーベル——その強力な積極的な側面をミヘルスは評価するのにやぶさかではなかった——はプチブル的で、国際問題に精通せず、荷が勝ちすぎ、とどのつまりはあまりにもポメル的な下士官の息子でありすぎ、若い理想主義者の群れを満足させなかった。祖国のためには死をも辞さないと彼が絶えず強調するのは、ウィルヘルム二世の帝国主義政策の邪魔をすどころか、助勢したのである⁽¹⁵⁾。ヴェルナー・ゾンバルトでさえ、1905年に出た『社会主義と社会運動』（第五版）で、ドイツ社会民主党の祖国問題に対する姿勢の章を、詳しく検討した後、次のような言葉で締め括らざるを得なかったのである。「このような表明のためにドイツ社会民主党は多くの外国の社会主義者たちからショーヴィニズムの非難を受けるのである。私が思うに純粋に社会主義的な信仰告白という点から見てもあながち誤りではないのである。」⁽¹⁶⁾

1906年末よりマールブルクに短期間ながら新しい活気もどってきた。ロベルト・ミヘルスもドイツ、フランス、イタリアでの講演旅行が許す範囲でそこに留まった。もっとも彼は1905年以来、ブリュッセルの新大学で講義を行っており、そこで彼はヴァンヴェルデ、ドレーフ、エンリーコ・フェッリ、ヴァンデルボッレンと一緒に仕事をした。テージンク兄弟とボイクが去っていった。そのかわり非常に生き生きとした思想家で何より教養豊かで演説の天分にも恵まれ、やる気と功名心に富んだアドルフ・ケスターがマールブルクにやって来た。彼はちょうどパスカルに関する著作を完成したばかりであった⁽¹⁸⁾。後に偉業をなし遂げることになる神学士もいたし、ケスターと並んで友人の哲学博士ルドルフ・フランツがいた。彼は嘲笑・頑固・詩的天分で際立っていた。この三人に第四番目として、社会主義に傾倒した若い学生ハンス・テッシュマッハーが加わる⁽¹⁹⁾。彼はここで入党した。ケスターとフランツは、党における生氣ある理想主義、中間政党と連合政策の否定、議会主義への反感、若者への情熱的アピールという点で心情的にミヘルスと一致していた。こうして1906/07年の冬、マールブルクで大学生を社会主義へ動員する精力的なころみがなされた。ク

ライマックスは国民自由主義的でドイツ・ナショナリストの教授団に対する弾劾であった。中には重要な人もいたが、彼らはマルティン・ラーデとパウル・ナトルプを除いては、社会主義の問題に真面目にとりくむのを自らの品位にもとるとみなし、そのかわり、たとえばミルプトやテオバルト・フィッシャーのように「若者を墮落させたり」王座と祭壇を転覆させる試みに対する強い反対の意志を表明することで自己の無邪気な無知を明らかにしてしまうのを恥とも思わなかった。ケスターがマールブルク大学図書館の司書でドイツ・ナショナリズムの傾向のあるマックス・クリストハーブの協力を得ることに成功し、ミヘルスが首尾よく知己の司祭でミュンヘン-グラドバッハーの中央党学校教諭のカール・ゾンネンシャイン博士の承諾を得た後⁽²⁰⁾、いよいよ1907年2月18日(月曜日)カフェ・クエンティンのホールで、社会主義・民族主義・学生というテーマで公開討論会が開催された。それは一つの事件であった。ホールは一杯。学生、労働者、市民のほかには何人かの教授たちも混じっており、その中にはパウル・ナトルプ、ハインリヒ・ジーフェキングがいた。討論は晩の8時から翌朝2時までたっぷり6時間に及んだ。左翼ブルジョア的なヘッセンの州新聞社説によれば、主催者にとってその晩は大成功であった。討論は聴衆全員の記憶に長く残るであろうと書かれていた。多くの人が話の内容を魂と国家にとり危険なものと感じはしたが、大きな都市では、表現の自由万歳と叫ぶだけではなく、表現の自由を実行し育てるべきなのである。「討論は、注意して耳を傾けてきた人には誰でも、かなりの思想と感情を喚起した。それは、結局同意するよりは反対せざるを得ない方が多かったとしても、彼らを豊かにした。」⁽²¹⁾ ドイツ社会民主党の出版物の反応は当然ながら賛嘆の調子であった。保守的な方は、声を大にして、若い人たちの頭を狂わせることにしかならない、学生を威嚇するような実験は二度としてはならない、と警告した⁽²²⁾。集会の中の民族主義的な学生の態度はあわれでさえあった。新聞にもあるように、彼らは討論に「女性も参加していたこと」にびっくりしてしまった。その一人ギーゼラ・ミヘルスの言葉を使えば、彼らは大

笑いたという。しかし、彼らが討論で語ったことからわかったことは、当時の大方の右翼の姿勢に相応しく、彼らが科学的討論には全く未熟であるということであった。古参の学生たちは儀礼作法の問題にかつとなり、良い教育について論じあったが、問われている問題を検討するところまで行こうとはしなかった。議論の内容からはいくつかのキーワードが繰り返されるばかりであった⁽²³⁾。ミヘルスはまず、新カント派のカール・フォアレンダーに捧げられ、出版されたばかりの小冊子⁽²⁴⁾で使った意味でのブルジョアの祖国概念を分析し、次いでマルクスのやり方になって階級と民族の関係を明らかにし、最後に三つの命題を提起した。その最後のものをここに転載しよう。

「〈祖国〉は歴史的に変化する概念であり、その限界は結局その時々
の権力関係の結果が規定する。しかし、〈民族〉問題は長期的には、現在の偶然の諸国家の歴史的になった国境、したがって歴史的に過去のものとなった国境にかかわりなく、すべての民族に自決権を保証することに解消される。この民族自決権は、しかしながら、それと密接にむすびつきたい
いわゆる社会問題の解決によってはじめて実際の効力を得る。しかし、こう
するとこの公式の愛国主義への批判に由来する唯一の義務は、文化的愛国
主義とでも呼べるもの、かつてゲーテが次のように語ったものと一致する。
『詩人が生涯をかけて、有害な偏見と闘い、狭量な見方を排除し、民族の
精神を啓蒙し、その趣味を純化し洗練しようと努力する時、それ以上の何
をよくなすべきであろうか、どのようにより愛国的な仕事をすべきであろ
うか。』民族の義務という考えを同化していこうとする国際的社会主義は
今日この前提の中にその高潔な存在理由をみとめる。」アドルフ・ケスター
は喜びいさんで語った。もしミヘルスが本質的に歴史家と社会学者として
語ったとするなら、ケスターは説教師のように語った。同等の地位にある
民族主義と帝国主義はブルジョア社会の最後の隠れ家であり、神に魅せら
れた花の最後の果実なのである。階級対立は国際的である。だから社会的
に考えるということは国際的に考えるということなのである。民族主義と

帝国主義は人倫にもとる。続いて弁士はこの問題への学生の態度を論じた。政府は常に支配階級の武器である。「この階級利害は必然的に、その邪魔をするものすべてに対立する。政府は学生に勉強と能力ではなく、王への忠誠のみを求める。あらゆる学問的職業は階級的職業なのである。」学生たちは本能的にだけ支配階級の支持者なのである。「我々と戦って見たまえ、そのいやらしい沈黙を放棄してみたまえ。」社会主義の敗北は文化の敗北である。ブルジョアジーからは善良さと正しさを教えられるが、ブルジョアジー自身がこの尺度で測定されるべきである。学生全体の四分の一がそもそも道徳的実存への権利を持っていない。今は学生がもっと政治生活にかかわる時なのである。今や新しい世界が生まれつつある。だが学生はそれに気づいていない。彼らは外国でのドイツの評判を落としている。我が国の高度の文化は道徳的でも正当でもない。学生の愛国主義は90パーセント馬鹿騒ぎである、と。ケスターが提起した議事プログラムは次のとおりであった。

「1. 今日の世界秩序での学生は偏らずに政治問題に立ち向かうことは全くできず、むしろ彼らはこのブルジョアの階級国家の付属物とみなしうるのである。2. にもかかわらず、まさしくこの学生に対して、その経済的依存のために、そして、たとえ今日では極めて僅かであっても、なお学問との接触が生み出すその理想主義のために、社会主義的世界観との接点が確かに提供されているのである。このようなたいていは倫理的性格をもつイデオロギーによって、ブルジョアの学生には文化の最初の原動力として、階級闘争としての社会主義的視点が浸透していくのである。3. 学生の政治参加はこの時代必要である。ドイツ社会民主党支持は社会主義的な文化理念の支持者にとっては自明のことなのである。未来のファナティズムに対してブルジョア社会は責めを負っている。」 討論は数週間の後大学都市ギーゼンでも繰り返された。

これらすべてからは衝動が感じとれる。熟慮がたっぷり行われている場合でさえ、しばしば、いきなり政治的に有害になるとはいえない衝動もど

きが優勢を占めた。それはブルジョア社会と体制に対する若い反動であるのみならず、結局は実際の労働運動に対する反動でもあった。それは、プラトンがフランス・サンディカリズムについて言ったように、党政治とその帰結への倦怠による有機的な反動であり、国民、なかならず理念に対する自分たちの高邁な使命を自覚していない職業的な党指導部の凡庸さに対する反乱であり、自己目的と化した組織に対するイデオロギーの闘いであった^(24a)。

この——究極のところ終末論的な——気分はマールブルク・グループを神々へと近づけていった。マックス・ウエーバーとヴェルナー・ゾンバルトが彼らの興味を引いた。ハイデルベルクで当地の意欲的な若いインテリたちの精神的中心となっていたウエーバー——彼は、自らからかい半分で名付けたように、一つの落選組展覧会を開いていた——は心情と性格においてまるで炎のようであった。ここに集まった若いインテリたちとは、その思想が新鮮で活発であるために、また政治的・社会的・宗教的原因でドイツでの公式の学界でうまく昇進できなかつたり、そもそもそこに入ることさえかなわなかった青年たちのことであった。ウエーバーの批判は上方と同時に下方にも、すなわち皇帝とユンカーに対してと同時に社会民主党にも向けられていた^(24b)。両者に対する彼の憤激の出発点は同じであった。すなわち、エネルギー、首尾一貫性、本物の自信、これらの欠如であった。マックス・ウエーバーは一度ドイツ社会民主党大会を見学したことがある。その結果彼は、1907年、ドイツの貴族たちにこう助言した。もし、彼らが社会民主党への不安を解消させたいのなら、一度傍聴席から党大会を見学してみなさい、そうすれば、そこに参集した一群の革命家たちの中ではいかに「でっぴりした宿屋のおやじ風の者、小ブルジョア的風貌の者が圧倒的である」かをみてとれるし、革命的情熱などには一言も触れられていないことが確認出来るでしょう、と⁽²⁵⁾。

当時ミヘルスはウエーバーとの類縁性を強く感じており、1911年の自著『現代民主主義における政党政治の社会学』⁽²⁶⁾を彼に献呈し、同じ心情

のゆえにウエーバーに感謝していると書いた。マックス・ウエーバーは後に、なるほど民主主義のために戦った。しかし、彼の民主主義概念はファシズム的ニュアンスを帯びていたのである。彼の最後の政治理念としてはやはりカリスマをあげることができよう。カリスマは彼の著作におけるのみ好意的に、かつすばらしく描かれているだけではない⁽²⁷⁾。彼は個人的にもそれを強く支持したのである。時おりウエーバーはシーザーやナポレオンのような(人民投票的な)イメージを心に描いていたようにさえ思えた。たとえば彼は大战終了後のルーデンドルフ将軍との珍しい会談の席で、本来民主主義で何を理解しているか言ってくれるように請われた時、自らそれをこう描いている。彼は率直にこう説いている。「民主主義において人民は自分の信頼する指導者を選ぶ。それから選ばれた者はこう言うのである。『さあて、今度はしゃべるのをやめて服従せよ。人民も政党ももはや自分に干渉することは許されぬ』と。』⁽²⁸⁾

マックス・ウエーバーとヴェルナー・ゾンバルトは新しい学派に彼らのアルヒーフの頁を提供した。(1904-1913) ロベルト・ミヘルス⁽²⁹⁾、アルトゥーロ・ラブリオーラ、エンリーコ・レオーネ、ユベール・ラガルデル、ミケレ・ベラルデッリが寄稿した。それに加えてアナーキストの陣営に属する学者もいた。彼らにとって、遂に第一級のブルジョア雑誌に投稿するチャンスはこれが唯一のようにみえたにちがいない。かくしてアルヒーフには、フェルディナンド・ドメラ・ニーウエンホイス、クリスティアン・コルネリセン、ルイージ・ファツプリの論文が掲載されることなる⁽³⁰⁾。

同じ頃——1904年頃から——ベルリンで医者兼顧問として非常に尊敬される地位を占めていたケーニヒスベルク出身のラファエル・フリーデベルクが不運にもアナルコ・サンディカリズムの名称で始めた新しい潮流とマールブルクは接点を有しはしたが、成果を生むほどの十分に理論的な一致点を見い出さなかった。フリーデベルクの反マルクス主義的なゼネスト理念⁽³¹⁾はあまりに単純で一面的であり、かつあまりに即興的で粗削りなため、強力な求心的作用を及ぼすことはなかった。かれにはまた著作家と

しての精確さが全く欠けていた。彼の作品としては一つか二つの論文があるのみで、しかもそれは講演を速記したものであった。勇気と誠実さのため彼は1908年には脱党していた。最初はアナーキズムの陣営に入り、次いで私生活へと戻っていった。

全く意外な接近が後にクルト・アイスナーとの間に生じた。彼は多くの相違点があるにもかかわらず彼の「倫理的・審美的」な世界観のいくつかの点において確かにアドルフ・ケスターやロベルト・ミヘルスと一致しており、歴史で作用する集団心理学的法則についての彼の深い知識は感動的な影響を及ぼした⁽³²⁾。ドルトムントの会議（1907年）についてケスターはミヘルスに、支柱となるのはアイスナーだ!と書いている⁽³³⁾。そしてシュトゥットゥガルトのインターナショナル大会において、ミヘルスと友好的に出会ったアイスナーは、ミヘルスの社会民主党に関する論文を楽しく読んでいと語った。おまけに、ミヘルスが「今までのマルクス主義的な業績」の後でこんなに立派な本を書けるとは思ってもみなかったと率直に語った。

当時のミヘルスはますます反ベーベルの立場へと押しやられており、そのため外国人の、とりわけイギリスの社会主義者たち——彼らはベーベルの権威主義を危険で反社会主義的であるとし、ドイツ社会民主党は政治的に未熟であるとみていた^(33a)——の目には共感できるように映った。ドイツ社会民主党と世界戦争に関する論文⁽³⁴⁾、そしてインターナショナル組織におけるドイツ社会民主党の位置に関する論文（後者はインターナショナル・シュトゥットゥガルト大会の直前に発表された⁽³⁵⁾）は多くの議論を呼び、なかなしくベーベル、ペルネルストルファー、ヴィクトール・アドラーらの不興を買うことになった。もっとも前二者とは、彼が党活動から全く身を引いた後数年たって、友情あふれる関係を再建することができたが。

このミヘルスのとった政策は自覚的に世界平和の維持を志向していた。そのためには、必要とあらばゼネストを含むあらゆる手段が動員されねば

ならなかった。とりわけドイツとフランスの戦争は絶対に回避されねばならなかった。この点では、グスターヴ・エルヴェ^(35a)やカール・リープクネヒト——ちなみに当時の彼は依然として非常に穩健だったようである⁽³⁶⁾——と一致していた。この問題ではミヘルスは1907年まで数年にわたって非常に熱心に活動し、それはドイツのみならずフランスやイタリアにも及んだ。ここでそれに立ち入るには及ぶまい。それは単独の論文のテーマとなるはずであり、そのような論文もそれ自身でとりわけ世界戦争勃発についての論文として無意味ではなからう。

フランス流の本来の意味でのサンディカリズム的活動について、当時のドイツで正確に語ることができなかったのは勿論である。自由労働組合はその分野での絶対的ヘゲモニーを握っていたからである。いわゆるロカリステン(地方主義者)は優れた人物をひとりも擁してはおらず、全く生彩を欠き、文字通り常に「地方的」に留まっていた。ミヘルスは1906年2月21日パリにおける演説の発表——ベルリンの“Einigkeit”⁽³⁷⁾——を度外視すれば、彼らとはほとんど交渉をもたなかった。社会主義的政策の指導を党の手から先鋭な社会主義的志向性をもった労働組合の手にわたすにはドイツにはその諸前提が全く欠落していた。厳密にソレル流のエリートが登場にとっても同様で、なるほど精神的には修正主義者の中に存在しはしたが、政治的には、すなわち直接行動という犠牲的な方法で精力的に権力を追求するという意味では、どこにも見出せなかった。ドイツの労働運動には革命的伝統が欠けていた。長い間維持されてきた、紙のように受動的な出版物と組織の力はむしろ、ドイツの労働運動にとって重荷になっていた。従ってミヘルスは、ドイツでは左翼革命的で、多少ともマルクス主義的なグループを頼らざるを得ず⁽³⁸⁾、そこからヘーニッシュとの交遊とかカール・カウツキーやローザ・ルクセンブルクとの大体において良好な関係も説明がつくのである⁽³⁹⁾。学問と党理論についての彼の仕事は、言語と国でいうと、——この点ではゾンバルトが正しくみていたが——ほとんど全くフランス(語)とイタリア(語)に負っており、イギリス(英語)

ではなかった⁽⁴⁰⁾。功名心も無く、純粋な理想主義者として、政治の学問的分析には向いていても、その実践的应用には不向きな者として、彼は、もともと自分にも気のつかない長い過程を通して政党の生体解剖にたどりついたのである。彼はそれを、苦痛にみち、何かの生き物を切り刻むようにして、政党政治に関する彼の本に書き始めた。フリードリヒ・ナウマンは彼流に、この発展過程の中にポイントを置いていた。彼は書評で回顧的に書いている⁽⁴¹⁾。

「ミヘルスは理想主義的の革命を共に体験しようとしてでかけ、新しい闘争の党のリズムへの献身からあっさりと社会民主黨員になり、向こう見ずにも社会民主主義とアナキズムの境界を彷徨い歩き、南欧諸国のサンディカリストたち（革命的労働組合）と親しく交わった。こういう遍歴の中で彼は大衆の鈍重とその指導者の不自由さを知るようになる。彼の本を読むとわかるのだが、彼はこう問うているのである。何故激しい雷雨が来ないのか。革命のロマン主義者は、現実があまりにもゆっくりとして気が抜けていることをいぶかしく思う。諸力を安んじて浪費することに対して誰が責任を有するのか。時に彼は、もし大衆を掌中にしたら何をするか空想する。しかし彼が大衆を掌中にしたら、彼は全くの別人になるのであり、そもそも彼のような人は大衆を獲得することはないのである。それにはもっと単純な構造が欠かせない。ひとは事実上のリーダーのみを観察するようになる。こうして革命家は理論家となり、禍いを転じて福となし、諦めを伴った研究の成果を書く。これによって彼は新しい、まだ未熟な学問である社会学に、方法的にもよく洗練された貴重な寄与をなしたのである。」

シュトゥットガルトでの第7回インターナショナル大会（1907年8月）にはロベルト・ミヘルスもイタリア代表、当然のことだがサンディカリスト・フラクションの代表として参加した⁽⁴²⁾。当時彼はトリノの大学で経済学の私講師であった。この機会でヴェルナー・ゾンバルトは、ミヘルス等を通してフランスとイタリアにおける強力なサンディカリズムの登場に注目させられたばかりで、すぐさま近代の労働運動における新しい

理論を知ることによって認識を深めたいという、つくりくする学問上の渴望を強く示した。彼はただちにシュトゥットゥガルトに赴きその会場でミヘルス夫妻の仲介でフランス・サンディカリズムの指導者たちと相識ようになった。その中の幾人かは卓越したインテリであるように思われた。哲学者エドワード・バルトはソレルの愛弟子で北フランス人、自身でパリの『社会主義運動』誌を編集もしていた。ユベール・ラガルデルはトゥルーズ出身で、ホーヘンツォーレル家とつながりのあるロシア貴族出身の美しい妻 Sinaja を伴っていた。時々フランスのゼネスト宣伝のリーダーで革命的週刊誌『社会闘争』La guerre sociale の主宰者のグスターヴ・エルヴェ教授も仲間に加わった。彼は女友達のロシア人ボリス・クリシュヴィスキーと優れた社会主義者の国会議員でメッシーナ大学の古代史教授でもあるエトローレ・チッコッチェを連れて来ていた。それは卓越した精神能力とヨーロッパで名の知られた極上の人々の集いであった。彼らはゾンバルトに、「愛すべき、すばらしい、教養のある人たちであり、優雅な女性を伴った、みだしなみもよい文化人であり、同等の人として喜んでつきあえる」、そのような印象をあたえた⁽⁴³⁾。一方のゾンバルトとの立ち入った私的な議論の学問的成果はさほどみるべきものは無かった⁽⁴⁴⁾。

ほぼ四半世紀前の一つの時代を扱った以上の文章は控えめな歴史的論文以上の何ものでもない。筆者は量的にも質的にも、控え目という言葉に価値をおいている。しかし、この論文はやはり興味を呼ばずにはおれまい。この文章から、当時のフランスやイタリアの労働運動を際だたせていたサンディカリズムのような運動がドイツでも、全く痕跡を残さなかったわけではないということがわかるだけでも興味をよぼう。

注

- (1) 本稿の著者はここでは、他の例にみならって、常に第三者として、すなわち客観的に振る舞うであろう。それはできるだけ距離をとること（はるか昔のことなので必ずや容易であろう）を意味する。

- (2) *Protokoll über die Verhandlung des Parteitags der Sozialdem. Partei Deutschland*, München 1902, Berlin 1902, Vorwärts, p. 89.
- (3) Hermann Molkenbuhr : *Sozialdemokratisch oder national? Redkampf mit Herrn von Gerlach*, Emden 1900, Gerhard, p. 62.
- (4) Curt Eisner : *Nationalsoziale Grundirrtümer*, in Eisner : *Taggeist. Culturglossen*, Berlin 1901, Edelheim, p. 110.
- (5) H. von Gerlach, 'Die Marburger Sozialdemokratie' *Die Hilfe*, IX, 3 (1908), p. 9.
- (6) H. von Gerlach, 'Sozialdemokratische Irrungen und Wirrungen', *Die Nation*, Nr. 50 (1903), p. 790.
- (7) ロベルト・ミヘルスのマールブルク滞在はもともと生涯のエピソードであった。かれは西ドイツの大学で歴史学の教授資格を取得するつもりであった。そのために諸般の悪条件のもとでマールブルク行きを薦められ、仕事場をトリーノ（後に再び舞い戻るのだが）から当地へ移した。社会民主党への入党は教授職をア・プリオリに不可能にした。（ミヘルスの素性については次を参照せよ。Robert Michels : Peter Michels und seine Tätigkeit in der rheinischen Industrie, in der rheinischen Politik und im rheinischer Gesellschaftsleben, im 12. Jahrbuch des Kölnischen Geschichtsvereins, Köln 1930.）
- (8) 参考までによると、当時関税問題で激しく争われており、社会民主党で広い範囲で批判が展開されていたために、他への関心が脇へ押しやられ、すべての理想が沈黙を余儀無くされていた、ということのを思い出すべきであろう。ゲルラッハは関税案件には反対する旨表明していた。
- (9) Aus Künsnacht, 15. VIII. 1903.
- (10) *Protokoll über die Verhandlung des Parteitags der Sozialdem. Partei Deutschlands zu Dresden 1903*, Berlin 1903. Vorwärts, p. 135.
- (11) Ebendort, p. 229.
- (12) ミヘルスのこの比喩は後にベニート・ムッソリーニの有名なジェノヴァ演説で使われた。（Benito Mussolini : Il dovere d'Italia. Discorso inedito in *Il Carroccio* [The Italian Review], Rivista mensile di cultura, propaganda e difesa italiana in America, anno VIII No. 5, New York, maggio 1927. p. 499）
- (13) Bernard Shaw : Socialism at the International Congress, in *Cosmopolis*, III 9, p. 67 (Paris 1896).
- (14) Michels, auf dem Parteitag in Jena 1905 (*Protokoll*, p. 184).
- (15) Vgl. die Abhandlung "August Bebel" in Michels : *Bedeutende*

Männer. Charakterologische Studien, Leipzig 1927, p. 1-37.

- (16) Jena, Fischer, p. 185.
- (17) 大衆の心が弁士の口元に懸かっているという彼のすばらしい考察を参照。
(Ad. Köster : *Sieben Schornsteine*. München 1909, A. Langen, p. 112).
- (18) Adolph Köster : *Die Ethik Pascals, eine historische Studie*.
Tübingen 1907, Mohr, p. 172.
- (19) テッシュェンマッハーは当時次の著作にたずさわっていた。Die
Einkommenssteuer und die Revolution in Preußen (Tübingen 1912,
Laupp XI-80 pp.)
- (20) カール・ゾンネンシャインはその時の気持ちをこう言い表している。ミヘ
ルスそれを心にとめていた。「強力な世界観はどんな障害をも越えて手を
差し延べ、内的に把握されたキリスト教は黄金の天空を皆の頭上にアーチとし
て、すべての理想に天のきらめきをおくるのである。友情と献身を以て。」も
ともとはすばらしいことだった。マールブルク討論会に出席した最初の人だった
が、それには自党の宣伝という合目的な理由が決定的であったことは当然と
みなすことができよう。— ゾンネンシャインについては Ernst Thrasolt と
Höber による二冊の伝記を参照せよ。
- (21) Nr. 52, XXII. Jahrg.
- (22) Oberhessische Zeitung (Bund der Landwirte) vom 20. Febr. 1907.
- (23) Hessische Landeszeitung Nr. 43.
- (24) Michels : *Patriotismus und Ethik*. Vortrag, gehalten in der
Gesellschaft für ethische Kultur, Wiesbaden und Berlin, Leipzig 1906,
Dietrich.
- (24a) Georges Platon : *Un Leplay ateniense. L'Economia politica di
Senofonte*. Milano 1919, Alabrigli, p. XVIII ff.
- (24b) これについてはマックス・ウェーバーの貴重な書簡を保存しているが、
ここでそれに立ち入るには及ばないであろう。
- (25) Max Webers Rede auf der Magdeburger Tagung des Verins für
Sozialpolitik, Kopie des Stenogramms von 2. Oktober 1907.
- (26) Leipzig, Klinkhardt, 528 pp.
- (27) Max Weber : *Wirtschaft und Gesellschaft*, im “*Grundriß der
Sozialökonomik*”, III. Tübingen, Siebeck 1925, p. 140 ff.
- (28) それに対してルーデンドルフ「そのような『民主主義』なら私の気に入る
かも知れない」。ウェーバー「その後人民は審判することができる。もし指導
者が過ちをおかしたならば、彼を絞首台にかけるということになるでしょう。」

(Marianne Weber : *Max Weber, ein Lebensbild*. Tübingen 1926, Mohr, p. 665. [マリアンネ・ウェーバー, 大久保和郎訳『マックス・ウェーバー』II, みすず書房, 1972年, 488頁])

(29) 後に(1913年の5月, イタリアの大戦参戦に際して離れるまで), ロベルト・ミヘルスはマックス・ウェーバー, ゾンバルト, エドガー・ヤッフエと共にこの雑誌の編集そのものを引き受けることになる。

(30) 当時“*Archiv*”に発表されたものとしては次があげられよう。

ドイツ社会民主党批判としては,

Robert Michels : Die deutsche Sozialdemokratie. I. Parteimitgliedschaft und soziale Zusammensetzung (*Archiv* XXIII, 2, September 1906) ; Michels : Die deutsche Sozialdemokratie im internationalen Verbandsverbande. Eine Kritische Untersuchung (*Archiv* XXV, 1, Juli 1907) ; Luigi Fabbri : Die historischen und sachlichen Zusammenhänge zwischen Marxismus und Anarchismus (*Archiv* XXVI, 3, Mai 1908), (マルクスとバクーニンの理論の間には根本的な違いが存在しないことを証明したこのファブリの優れた論文については後にハンス・ケルゼンが触れている。Hans Kelsen, *Sozialismus und Staat. Eine Untersuchung der politischen Theorie des Marxismus*, Leipzig 1923, Hirschfeld, p. 85 f.) ; Ferdinand Domela Nieuwenhuis : Die staatssozialistische Charakter der Sozialdemokratie (XXVIII, 1. Januar 1909) ; Karl Vorländer : Marx oder Kant? Ein Beitrag zur neuesten Diskussion über dieses Thema (XXVIII, 3, Mai 1909).

イタリア社会主義批判としては,

Michele Berardelli, Rezension über Michels : Proletariato e Borghesia nel Movimento Socialista Italiano (XXVII, 3, November 1908, p. 848-851) ; Arturo Labriola : Der Marxismus in Italien (XXXI, 3, November 1910).

社会主義とアナキズムの批判としては,

Christian Cornelissen : Über die Evolution des Anarchismus (XXVI, 2, März 1908).

サンディカリズムについては,

Hubert Lagardelle : Die syndikalistische Bewegung in Frankreich, I (XXXVI, 1, Januar 1908) ; II. Die gegenwärtige Lage des Syndikalismus (XXVI, 3, Mai 1908) ; Christian Cornelissen : Die neueste Entwicklung des Syndikalismus (XXXVI, 1, Januar 1913).

『ドイツ社会主義におけるサンディカリズムの底流 (1903-1907)』

フランス社会主義については、

Paul Louis : Die Einheitsbestrebung im französischen Sozialismus (XXVIII, 2, März 1909)

史的唯物論については、

Achille Loria : Alte und neue Einwände gegen den historischen Materialismus (XXXV, 3, November 1912); Loria: Friedlich Engels und der historische Materialismus (XXXVI, 3, Mai 1913).

- (31) Vgl. den Artikel von Robert Michels : Anarchismus, im *Handwörterbuch des Gewerkschaftswesens*, Berlin 1930, Vol. I, p. 47 ff.
- (32) Vgl. Michels : Kurt Eisner. Unter Benützung persönlicher Erinnerungen, *Archiv f. d. Geschichte des Sozialismus*, Bd. XIV, Heft 3.
- (33) 22. 9. 1907.
- (33a) Ernest Belfort Bax, *Reminiscences and reflections of a mid and late Victorian*, London 1918, Allen, p. 148; Vgl. auch H. M. Hyndman, *Further reminiscences*, London 1912, Macmillan, p. 129 ff.; Daniel De Leon, Notes on the stuttgart Congress, in "*Weekly People*", New York, 14. 1907.
- (34) Im "*Morgen*", Nr. 10, vom 16. August 1907.
- (35) Im *Archiv für Sozialwissenschaft*, 1907, Vol. XXV, 1.
- (35a) Gustave Hervé, *Leur patrie*, Paris 1905, Librairie de Propagande Socialite. ドイツ語ではとびぬけた悪訳で出された。(Zürich 1907, Sozialistischer Verlag)
- (36) 1907年に出たリープクネヒトの作品の書評を参照。Liebknecht, Militarismus und Antimilitarismus, im "*Mouvement Socialiste*", IX. Année, p. 253 ff.
- (37) Jahrgang 10, Nr. 21-25, Mai-Juni 1906.
- (38) 当地の新聞雑誌でマルブルク人は、ある程度まではもちろん党の内部抗争においてのみでも、きわめて誠実で愛すべき前の建具職人、ギーセンのフリードリヒ・フェッターに率いられた中部ドイツの日曜紙と、あらゆる面で造詣の深いマックス・クワルク博士 — 彼はマルブルクのロマン主義者とは大きく意見を異にするが、党内の中央派と(無意識の)民族派の打倒という点ではやはり非常に近い位置にあった — の主宰する重要な Frankfurter Volksstimme 紙を完全に頼りにしていた。
- (39) 当時のドイツ社会民主党のマルクス主義知識人の何人か、特にカール・カ

ウツキーの『社会改良と社会革命』と『社会革命の翌日』(Berlin 1902, Vorwärts), そして同様にゼネストについてはオランダ人のヘンリエッタ・ロランド=ホルストの著作(1. Auflage Dresden 1905; Kaden)がマールブルク・グループによって熱心に読まれ、共感をもって批評された。エドゥアルト・ベルンシュタインの著作に対するマールブルク・グループの姿勢は人間的、精神的に肯定的だったが、政治的には圧倒的に否定的であった。

- (40) Sombart, *Sozialismus und soziale Bewegung*, 7. Aufl., p. 111.
- (41) Fr. Naumann, *Demokratie und Herrschaft. Die Hilfe*, Nr. 1, 5. Januar 1911.
- (42) 数カ月後ミヘルスはイタリアの社会党から籍を抜いた。従って彼のインターナショナル社会主義への帰属は都合わずか5年間(1902-1907)であった。
- (43) Sombart, *Sozialismus und soziale Bewegung*, 6. Aufl., Stuttgart 1908, p. 110.
- (44) A. a. O., p. 10-142; pp. 266-275.